

講義
15まちづくりへの
参加のデザイン

まとめ

人口減少の時代、今後は全国的に人口が減り続けることが確定しています。そこで、私たちが今考えるべきなのは、人が減ることを前提にしたまちづくりです。まちづくりとは、地域の課題を解決する取り組みの総称であり、まちづくりの担い手は地域の皆さんです。まちづくりにおいて、参加者の納得をできるだけ有効に引き出す手段がワークショップ、それを運営する技術がファシリテーションです。会議を上手に進めるためにはいくつかのコツ・手法があり、手法を学ぶことにより主体的、かつ創造的に意見を出し合うことが可能になります。

災害と地域課題

災害が起きると、地域の問題は20年早回しで現れると言われます。例えば、阪神・淡路大震災のときに、木造密集市街地では火災が起きやすいという地域の課題が顕在化しました。誰もがこの場所は危険だ、手を入れなければと思っていたことが、20年早回しに現実になってしまった。つまり災害時には、課題が早回しになって顕在化し、問題が一気に押し寄せてくるので対応が大変なだけで、地域づくり、まちづくりの課題を解決する取組みであるという点では変わりがないといえます。

人口減少社会における地域づくり

最初に、人口減少社会による発想の転換の必要性についてお話しします。皆さんは、限界集落という言葉の意味を、正確に理解しているでしょうか。限界集落とは、集落全体の高齢化率が50パーセントを超えているというだけではなく、これに加えて少子高齢化・人口減少などにより集落活動を維持することができなくなっている集落を指します。集落活動の維持とは、共同の草刈り、神社の世話、祭りなどを指します。

日本中には、将来的に消滅しそうな集落、小さな自治会がたくさんあります。日本は人口減少の時代に突入し、今から約30年間は確実に人口が減り続けます。例えば、2050年には、日本の人口が約8,000万人になると言われています。8,000万人になるということは、3分の1がいなくなるということです。人口減少が現実であるならば、私たちが今考えるべきことは、人が減ることを前提にした地域づくりではないでしょうか。人が減ったほうが幸せになるという社会をつくらないと、この世の中は幸せにならないのではないかと思います。

過疎地は日本の最先端

日本で最初に人口減少を経験しているのは地方都市です。もし人口が減っても皆が幸せ、人口が

減っても皆が元気というようなモデルをつくることができれば、誰も実現したことのない新しい地域のモデルが完成し、その地域は最先端な地域ということになります。また、田舎ではお年寄りが働いているということにも注目したいと思います。都会のお年寄りは働く場所がありませんが、田舎では9歳のお年寄りも、畑や田んぼに出て働いています。人口が減っても、高齢化が進んでも、元気に生活している地域はたくさんあります。なので、高齢化率の高さだけをとらえて問題視するのは間違っている気がします。

田舎の商店街を例に価値と効率について話しましょう。なぜ商店街が衰退したのかを、商店街の皆さんと話したことがあります。皆さん、人が減ったとか、お客さんがいなくなったと言います。しかし「本当にそうでしょうか。郊外のイオンモールにはお客さんがいるので、あなたの所に来ていないだけじゃないですか？」と問うと、今度は「大きなスーパーには価格で太刀打ちできない。価格が高いから問題だ」と言い始めます。でも、例えばコンビニエンスストアではほぼ定価で商売をしていませんか。それほど安くはないのに、お客さんがいます。高くても売れるところでは売れている。

では、価格が高くてローソンが繁盛している理由は何かという、価値を生んでいるからです。価値というのは、夜中でも開いている、チケットを買うことができる、税金を納めることができる、住民票を取ることができる、銀行の代わりになるなどです。つまり商店街が衰退しているように見えるのは、厳しいことを言うようですが、人がいないからでも、価格が高いからでも、どちらでもありません。人を呼び寄せる価値が足りないからだといえます。このことをヒントに、田舎でどのようなことを行えば地域の元気を出すことができるかを考えてみましょう。

イオンモール、ローソンが強い理由は何かという、効率を上げることにより、生産性を向上させる方法をとっているからです。しかし田舎では、この効率を上げるというよりも、価値を上げたほうがよい。田舎は価値の宝庫です。例えば、豊かな自然があり、美しい風景があり、とてもすてきな人たちがい

講師

あさみ まさゆき

浅見 雅之氏

合同会社人・まち・住まい研究所
代表

2010年「人・まち・住まい研究所」設立。ドアノブのような小さなモノから、地域計画のような大きなモノのデザインを対象に、計画に関係する全ての人々の関わり方の「プロセスデザイン」が得意分野。住民参加による計画・デザイン・設計・施工・運営等をコーディネートしている。

て、地域のコミュニティがとても根強いんです。都会の人たち、学生たち、子育て家族は、お金を払ってでもその地域を訪れたいとか、農村体験や田舎暮らし体験をしてみたいと思っています。それらが地方の価値です。たくさんある地方の価値を見つけ、それを高めることが、これからとても重要になります。

これからは、人が減り、時代が変わり、発想の転換が必要になります。価値観も少し変えなければいけません。時代が変わってきている中で、私たちは、何か別なアイデア、別なメンタリティーといえますか、マインドセットを手に入れておかなければいけないと思います。

まちづくり・地域づくりとは何か

本題のまちづくりの話に入ります。まちづくりとは何でしょうか。まちづくりほど定義の曖昧な言葉もありませんよね。例えば、道路や住宅地を造るということもまちづくりといえると思いますが、私は「地域の課題を解決する取り組みの総称」がまちづくりだと定義しています。

そして、まちづくりの主役は誰だと考えるのが適切でしょうか。地元選出の議員さんでしょうか？それとも、大学の先生のような専門家、それとも市長、町長、村長かも知れません。でも、もし、まちづくりが「地域の困りごとを、長期にわたる自分たちの取り組みで解決しようとする活動」だとするのであれば、まちづくりの主役は地域の皆さんでしかあり得ません。地域のことを一番よく知っているのは、地元の皆さんです。私たち専門家や行政職員の役割は、自分たちで解決しようとする皆さんをできるだけサポートすることだと思っています。

市民参画社会における納得のプロセスデザイン

地域づくりのワークショップ、合意形成の場で重要になることは、円滑なコミュニケーションの方法だと、私は思っています。つまり、町や地域で皆さんが幸せに暮らすために必要なことは、話し合いの技

術ではないかと、私は信じて疑っていません。

誰かが誰かを説得するのではなく、皆で問題を共有する・きちんと話し合う、そのような関係づくりが大切です。誰かを説得しようとしている人は、たいがい人の意見を聞いていません。内容を伝える、理解させる・説得するというだけでなく、相手の話を聞き、対話の中に共感や納得を生む必要があります。多くの人が参加する場所では、それぞれ意見の違う人がいることが当たり前で、どのように決めても、不満が残る人が出ることもよくあります。そこを乗り越えるためには「納得」が重要になります。納得とは「意見の違いを理解したうえで、同意をするということ」。皆で決めるとは、この納得をできるだけ引き出す作業だといえます。

市民参加手法としてのワークショップ

この納得をできるだけ有効に引き出す手段がワークショップであり、ワークショップを運営する技術が、ファシリテーションです。例えば、「旗揚げアンケート」という手法があります。これは、皆さんが意見を言い始めるという不思議な道具です。1番から5番までの旗を全員に配り、皆さんに質問をします。ここで「消費税の増税についてどのように思いますか。意見のある人は手を挙げて話してください」と聞いても、手を挙げる人は普通はいません。ところが皆さんに旗を配りルールを説明します。1番から5番までの表を作り、1番は消費税増税の大賛成、2番は嫌だけれども仕方がない、3番は絶対に反対、4番は目的により賛成、5番はその他などのように決めます。1番から5番までの旗の中で、自分の意見に一番近い旗をあげてくださいという、全員旗をあげます。あげた人に、なぜその番号をあげたのですかと聞くと意見を述べる人は格段に多くなります。

普通の話し合いに比べて、旗をあげるワークショップの手法が有効な理由は、選択肢が示されているので答えやすい、とか、ゲーム的で、意見表明の抵抗が少ないということがあげられます。あとは、他の人の意見を見ずに一斉にあげれば、誰かの意見に流されることがないし、「その他」の項目を設けれ

ば、こちらの選択肢に入っていないことを考えている人たちの意見を聞くこともできます。そしてさらに、私が一番大事だと思っていることは、少数意見を黙殺しないことが可能だということです。工夫次第で、会議も活発に行うことができるかもしれないと思いませんか。このように、参加者全員がフラットな関係で旗をあげる、付箋を書くなど、いろいろなワークを通じて主体的、かつ創造的に意見を出し合うような話し合いの場をつくる方法がワークショップです。

住民主体の地区復興 ～宮城県気仙沼市～

震災から半年後に、初めて気仙沼に行き、仮設住宅で話を聞いてまわりました。仮設住宅の期限である2年で絶対に出なければいけないのかなど、様々な悩みをお聞きしました。延べ80カ所ほどの仮設住宅をまわり、皆さんの悩みや意見をお聞きすることを続け、このときに私は、皆さんの意見を残しておけば何かの役に立つと思ひ、皆が見ることができるようにと仮設住宅に配られ始めたホワイトボードに、皆さんの意見を書き始めました。

ホワイトボードには皆さんの意見が書いてあるだけなのですが、書いて残しておく、皆が消さないで残していることも多く、どうやら皆さんの役に立っているようでした。

気仙沼市唐桑半島の只越地区で、防災集団移転、災害公営住宅への入居を希望する方への個別ヒアリングを行いました。被災の状況を聞き、借金がどの程度、土地はどの程度、自分で再建をするのか、集団移転をするのか、公営住宅に住みたいのか、希望を聞かせてもらい、こちらから土地の買取り制度、生活再建支援金、自己資金、ローン、再建のための資金計画の考え方を説明しました。資金について、どのように考えればよいのかを示すと、その後、皆さんが自力で考え、私はやはり公営住宅に入る、高台移転先で防災集団移転を行う、自力再建する、といったことを決められるようになります。つまり、皆さんが自分たちで考えるためのコツをお教えし

たということです。

他の地区では、防災集団移転先の申し込みをした人が半分以上いなくなったところもありましたが、只越地域では、途中で抜けた人がほとんどいません。災害公営住宅に申し込みを行った後に、よそに行った人も1人もいませんでした。皆さん、今は円満に暮らしています。

こうした被災地での住宅再建の現場でも、皆さんの話を聞くということ、目の前で文字にしてお互いの悩みを共有するということがとても大事でした。じっくりと話を聞く人がいるだけで、安心してもらうことができることを実感しました。ある方には「こちらには、とてもたくさんの人が来てくれましたが、これほどきちんと私たちの話を聞いてくれた人は初めてです」と言われたりもしました。

ホワイトボードに書くということは、ファシリテーション・グラフィックと言いますが、議論の経過が皆の前で記録に残ることが大事です。皆の気持ちを整理して、質問リストにして、とても助かったと言われたことがあります。

ホワイトボードを使えば、その場で議事録のチェックを行うことができますし、書いてあることが違うというような指摘もしてもらえます。携帯で写真を撮ればメモの必要もありません。参加していない人、遅刻した人も内容が分かります。議論の流れがよく分かり、話が脱線しなくなるという利点もあります。ホワイトボードの活用には利点が多く、皆の意見を書いていくと、会議が変わります。多くの地域会合で身につけるとよい技術だと思っています。

まちづくりについて、私が皆さんにどうしても伝えたいことは、地域の課題は地域の人たちが解決すべきだということです。行政や専門家の力を借りますが、その主役は地域の皆さんであるべきです。今はそのようなフラットな社会になってきていますし、価値の転換が行われている社会だからです。地域のことは、地域の人たちが、フラットな関係の中で、決めていく必要があると思うのです。